

実践報告

「先生、話し合いも

いいもんだね」

—授業は、生徒とともに

真実をさがす旅—

東京都立高校教諭

小泉 秀人

1. 教えた生徒たちと私

一瞬、言葉を失った。前任校での出来事だ。

廊下を歩いている私の目の前で、生徒が唾を吐き捨てた。室内である。あわてて注意したが、悪びれる様子もない。注意して見ると、廊下のそこかしこに、吐き捨てたガムや唾。

NHKの番組『プロジェクト X』のオープニングのようだが、それが現実だった。授業中は化粧、携帯、マンガ、居眠り。一部分ではない。どこの集団でも、支配的な雰囲気というのが、あると思う。不真面目なポーズが、支配してしまっていた。真面目な生徒の方が小さくなっていった。クラスで文化祭の出し物を決めるH.R.で、可愛いいまともな意見を出した生徒に、うさんくさそうな視線が集中した。

3年生の現代社会を担当することになった時、こんなことを考えた。前述のような教室空間で、「主権在民」とか「民主主義」とか、ただそのコトバを教えても、空しいだけだ。話し合いが成立しないで、なにが「民主主義」だ。そして、生徒は授業に関して、全く期待していないようにみえる。一般受験にも、ほとんど関係なさそうだ。それなら、生徒が学びたいと思うことを、思いっきりやってやろう。

以下は、私の前任校である、ある都立高校での、2001年度の実践についての報告である。たまたま対象となったのが3年生の進学類型（四大・短大・専門学校進学第一希望）2クラス66名。その7～8割の生徒は2年のとき私が日本史を教えていた。

2. 何から始めるか

生徒が学びたいことは、生徒に聞くしかない。そう思って、第1回目の授業でアンケートをとることにした。それも、教科書の項目そのままでは芸がないと思った。教科書の内容を、私なりにくだいた

33の項目にしたプリントNo.1を配り、「項目ごとに説明するから、聞いてて勉強したいな、と思ったら記号を○で囲んでくれ。」と指示した。

その説明のなかで、「オ. どんどん高齢化社会になっていったら、この先どうなる?」とか、「コ. ごみ処理場がもういっぱいだ」などの項目では、「これが正解だ、なんてないと思う。でも、僕の考えは言うつもりだし、君たちが質問したり、意見言ってくれたりしたら、僕も調べたり考えたりして、お互いに学び合えたら、この一年間の授業も、ムダじゃなかった、と思えるかもしれないね。」といった話をした。

休み時間に、別々に二人の生徒がやってきて、「先生、絶対に宗教やろう。」と異口同音に言う。私は、その二人のやる気に賭けてみる気になった。

3. “宗教”の授業

2回目の授業で、NHKのシリーズ『イスラム潮流』のビデオを30分ほど見せた。合わせてプリントNo.2を配り、ビデオを見るとわかる空欄補充問題などをやらせた上で、「君にとって宗教とは?」というタイトルで書かせてみた。

生徒の記述は、「自分にとっては必要ない」「バカらしい」「関係ない」が圧倒的だった。私は直感的に「これは危ないぞ。」と思った。

そこで、3回目の授業では、こんなプリントNo.3を配った。「宗教の必要性」にふれた少数派の意見と、多数派の意見を9つずつ抜粋し、私の手書きで書いてアからツまでの記号をつけた。そして、「強く共感する意見に◎、共感するものに○、反発する意見に×、すごいやだ、というものに××を記号の左につけよ」などと指示した。さらに、前回見たビデオの続きで、重罰に処せられた囚人たちが、「過去の罪は許される」といった説教を聞いて改宗したりする内容の映像を見せ、プリントの最後に自由意見を書かせた。

記名提出されたプリントを見て、私はうなった。「罪が許されるなんて、おかしい」「自分に都合のいい思い込みだ」などと書く生徒たち。ずっと“いじめ”的言動にあいながら負けなかった女子生徒は、「宗教を信じるのはその人の自由だが、忘れてならないのは、結局自分を救うのは自分自身なのだ。どんなに泣いても叫んでも『アラー』も『キリスト』も助けてくれない」と書いた。また、「宗教とは心

のよりどころであり人生の参考書だと思う。だから政治と結び自分たちの利益を得ようとしてはいけない(30年戦争, 十字軍)と思う」「中世ヨーロッパのキリスト教が医学の発展を遅らせたように、強大なものになってはならない」といった意見には、「うちの生徒でもここまで書ける者がいるんだ!」と驚嘆した。

私は、それらの意見に、テからヤマまでの記号をつけ、「宗教はウソつきか?」など4つのテーマごとに分類して手書きしたプリントNo. 4を配り、さきに提出されていたNo. 3も返した。自分たちの意見が記されたプリントは、生徒の食いつきがちがう。なかには、「ほら、これオレの。」と、うれしそうに指さして回りの者に見せる生徒もいる。私は、テーマごとのフリートークングを呼びかけたが、教室は白けてしまった。

そこで、No. 4のテからヤマまでの意見に、No. 3のときと同様、◎○×などの印をつけることと、No. 3とNo. 4の意見で、コメントしたいものがあったら自分の意見をわきを書くことを指示して、2枚とも提出させた(この、コメントをつける、というのは、生徒がやっていることに学んだ)。

その結果は劇的だった。以下に記すケの意見に、◎や「同感」「賛成」のコメントが集中したのだ。「ケ。信じる人が信じ、信じない人は信じない。それでいいと思う。だけど、信じる人が信じない人に押しつけをしてほしくない」

5回目の授業で、2枚のプリントを返し、宗教の授業のまとめをおこなった。そのなかで、ケの意見に共感が集中したことを紹介し、私もとてもいい意見と思うと言った上で、「内心の自由」という言葉を紹介した時、教室の空気が大きく変わったことが感じとれた。何人かの生徒の顔はパーッと輝いて、「うん、心から納得したよ、先生!」と無言で語っている。なかには、何度も大きくうなずく者もいる。2クラスともそうだった。何年かに一遍、感じられるかどうかの手ごたえ。「いける」と私は直感した。

4. “家族・家庭”という危険なテーマへ

次の授業のテーマは、生徒のリクエストとは無関係に、“家族・家庭”とした。チャンスがあったらやってみようとは思っていたが、じっさいに、深刻な家庭の問題を抱えている生徒が多いなか、危険なことは確かだった。しかし、私のなかに、「危ない

テーマにギリギリ接近したときに、授業のなかで、生徒も教員も変わるような、生きた授業ができることがある。」という思いがあった。生徒と教員の間に、ある程度以上の信頼関係が成立していることを前提に、ひよっとしたら……。“宗教”の授業の終わり方が、私の背を押してくれた。

全体で6回目の授業。家庭科準備室に貼ってあった、「育児をしない男を、父とは呼ばない」という文字の入ったポスターを借りて、黒板の真ん中に貼った。そして、家庭科から、生徒の人数分『資料 家庭一般』(実教出版)を借りてきて、授業中だけ配った。

B5判のプリントNo. 5を配る。一番上に「㊟プライバシーは厳守します」と書き、氏名記入欄の下に、次のまえがき。

「一人住まいも含めて、誰でも家庭をもっている。その家庭が、今、ゆれている。悩んでいる人も多い(私も)。だから、お互い、しっかりした考えを形成しよう。今は苦しんでいない人も、いつか問題がおこるかもしれない。今苦しんでいる人は、一人で苦しまず、他人の意見も参考にしよう。打ち明けられる人がいたら打ち明けよう。それだけでも、気持が楽になるかもしれない」

そしてその下に、

「1. 今、ゆれていること

ア. 「男は外で仕事、女は家事」という考えに対して

イ. 「結婚しなくてもいい」と思う人がふえている

ウ. このまま少子化が進んだら、どうなる?

エ. このまま高齢化が進んだら、どうなる?

オ. 親と子の気持が通じ合えない

カ. 子を傷つける親、親を傷つける子

キ. その他()

2. 授業での説明を聞いたり、教科書を読んだり、自分や知り合いの家庭を思いうかべて、1のA~キ(キは自分で書いて)の中で、とりあげてほしいテーマに○(どうしても、は◎)、とりあげてほしくないテーマに×(どうしても、は××)を記号の左横につけてくれ。そして、その理由を下に書いてください(足りなければ、ウラへ)。

(場合によっては、「家族・家庭」というテーマ自体中止します) 」

と書いたプリントだった。

プリントを配った後、『資料 家庭一般』を参照させながら、ア～エの項目を解説した。導入として、核家族化や選択的夫婦別姓の話をして、たとえば、アについては、「性別役割分業」という語句を紹介し、資料集に載っている、“生計を支えるのは女、家を守るのは男”というニューギニアのチャンブリ族を例にとり、役割分業の感覚は社会的なものだと説明した。オとカは、私の家庭のトホホな実態をつかって、生徒たちの笑いを誘った。

チャイムが鳴って、プリントを集めていると、スーッと一人の女子生徒が寄ってきた。「先生、聞いて聞いて。うちの親、すぐ、“女のくせに”って言うの。言われると、すぐくむかつく。」見るともう一人、教室の微妙な位置に立っている。さきの女子生徒と私とのやりとりが終わったと見るや、近づいてきて、「私、一番上だから、親が弟や妹に言うことと全然違う。ちょっと危ないけど、親を刺したくなる、って話あるじゃない。なんか、わかる気がする、ってときある。」職員室にやって来る生徒もいた。

とりあげてほしいテーマの傾向を見たら、ア～エはそれなりの数の○が集まって、×や××がなかったが、オとカは、◎も目立つ反面、××をつけた生徒が二人いた。そこで、私は、別々にその二人のところに行って、さりげなくこの話題を持ち出してみた。彼らからかえってきたのは、強い拒絶反応。この二つのテーマは、とりあげないことにした。

5. “家族・家庭”の授業

7回目の授業は、「なぜ“女のくせに”という発言が出てくるのか」「いま、家族はどう変わりつつあるのか」という問題意識で、家庭科の資料集を参考にしてつくったプリント No. 6 を配り、戦前と戦後での家族制度の変化などについて講義した。ここで、生徒たちに、そのテーマで自由意見を書かせたものに、手ごたえを感じた。いくつか記してみる。「ア。昔は自由がなかったが、しっかりしていて、今は自由すぎてだらしない。」「男女では能力的にちがうんだから、平等にしろという意見の方がわからない。だから8割ぐらいは戦前の家の方がいい。」「男女差別がなくなりいいことだと思う。でも遺産は長男が多くもらっていいと思う。」たぶん私の授業では、戦前から戦後への変化を、無意識にも肯定的に伝えたと思うのだが、それに対してこうした本

音が出てきたのは、とてもいいな、と思った。また、「やさしくなった。男の時代から女の時代になった」といった表現には、“いまどきの若者”らしいハイセンスなものを感じた。

私はまた、これらの意見を私の字でプリント No. 7 にまとめたものを配り、◎○×などの記入やコメント、自由意見を記させた。集めて見た時、「これならフリートキングできる！」と思った。それは、前記のアの意見への共感と反発が拮抗したことと、私がテーマ1としたア以外に、2つのテーマで、生徒たちの本音が噴出したと思えたのだ。そのテーマとは、

テーマ2. 「女性は強すぎ?」「女性は得?」「女はずるい?」

テーマ3. 「平等にするのはいいことか?」「真の平等とは?」

この3つのテーマで分類した、生徒たちの意見をまとめたプリント No. 8 を、No. 7 とともに配った。このプリントへの生徒の食いつきは、異常ともいえるものだった。ぐーっと集中して読んでいる。「あ、オレのが出てる!」と叫ぶ者。「何これ、気がしれねー!」と怒鳴る者。

6. 盛り上がったフリートキング

ひとわり読んだかな、というところで、「きょうはまた、フリートキングやってみようと思うんだ。」と言って、私のイスを教室の中央に運んで腰かけ、生徒たちにはそのまわりを囲む形になるよう、机とイスを移動させる。いつもの教室の雰囲気ガラッと変わるのが面白いのか、嬉々として行う者がいる。落ち着かなそうに、おすまししてすわっている者もいるし、顔を見合わせて笑っている者たちもいる。

私が司会をして、テーマごとに、代表的な意見に対して、「聞いてみたいことがある人!」「意見を言いたい人!」と聞くと、宗教の時とは違って、活発に手が挙がった。「今の人をだらしくさせたのは政治の責任」という意見に対し、賛否の発言が激突したことが印象深い。また、テーマ2についてはさらにヒートアップするなかで、「レディースデイは、女性を呼べれば男もついてくるという営業のねらいだし、女性専用車両だって痴漢が出るからで、両方とも女性がいばっているわけじゃない」という意見が、多くの者を納得させていった。テーマ3では、

プリントに記されていた、「必要なのは、平等ではなく、対等である」という意見に、賛成が集中した。

フリートーキングの感想を書かせたなかで、ある女子生徒が、「私は、今まで、レディファーストなんて言っていていい気になっていたが、男子の意見を聞いたりして、自分の意見を改めなくっちゃ、と思った。」と書いていたのがうれしかった。不登校で、ついには退学してってしまった女子生徒は、ほんの2週間くらい登校した、このときの授業について、消え入りそうな小さな字で、「先生、いろいろ教えてくれて、ありがとう」と書いていた。そして、どの時点か忘れたが、プリントを配っていた私に、前の方に座っていた男子生徒が、

「先生、話し合いもいいもんだね。オレ、こんなに、他人の意見で考えるとは思わなかった。」

と、声をかけてくれたことが忘れられない。

この時機に、この授業について発表する機会があり、そこに一人の男子生徒が付き合ってくれたが、その時彼が、こんな発言をしてくれた。

「高校生になって初めて、“答えのない授業”を受けた。中学までは、言われたことをただ写すだけだった。

小泉先生の授業では、他人の意見もいいな、とか、気がつかなかったことに気づいたりして、今の時点でこれがいい、という答えをつくって行って、納得できたと思えるのがよかった。

意見言える人は絶対言う。意見言えない人は書けばいい。同じ年代の奴がそこまで考えている！とショックを受ける。授業の後まで話題になるのは、今までになかった。」

この年の授業は、この後も幾多のドラマを生み出していくのだが、小稿の論旨からは、どんどんずれていってしまうので、ここで区切りとしたい。

7. おわりに

いま、都立高校では、「生徒による授業評価」をおこなっている。先日、「いい授業をしよう」と熱心に教材研究されている、別の職場の先輩が、「つまらない」「わかりにくい」と生徒たちに書かれて、とてもショックを受けたと言われていた。「静かに授業を聞いているから、いいと思っていたんですけどね。」ともおっしゃっていたが、この話が示唆しているものは大きいと思う。

小稿と同じ年度の、私の日本史の授業も、小稿の

ような展開をみせなかった。そのちがいは、どこにあるのだろうか。私は、小稿の現代社会の授業内容が、生徒たちにとって、“自分のもの”になったのではないかと感じている。そして、とくにこの実践以降、“教育の関係の成立”ということに思いをいたすようになった。授業で言えば、生徒が本当に学びたいものに、教員が教えたいものが、かみ合っているのかどうか。生徒が、「この授業では安心してものが言える。自由に書ける。」と感じて、教員とつながっているのかどうか。等々。

もちろん、その成立にはいくつもの障害があり、“言うは易く行うは難し”と承知している。しかし、とくに社会科（地歴・公民科）では、生徒を主人公とした授業が、主権者教育の第一歩として、求められるのではないだろうか。私の拙い実践が、その探究のひとつとして、受けとめていただければ幸いである。

私がいつも強く感じていることに、私たちの教育活動が、生徒たちの日常と、ずれてしまっているのではないかと、ということがある。どうしても、私たちは、自分も受けてきた、受験知を中心にする授業をやっけてしまい、生徒たちにとって真に必要なもの、という質を獲得できていないのではないだろうか。たとえば、「主権在民」「民主主義」といった理念が実感できていないところで、そのコトバだけ教えても、生徒にとっては、“ウソくさい授業”になってしまうのではないかと。生徒たちは、心のなかで、「それは一つの理想だろうけど、でも先生、現実はそのように甘くないよ。」とつぶやいてはいまいか。

また、私の実践を、「戦後の初期社会科が目指そうとして、果せなかったものを含んでいる」と評価して下さった方がいらした。浅学の私は、このことについて論及できない。本冊子の、宮原武夫先生の論稿を参照していただきたい。

最後に、これだけは言える。小稿の実践をさかいいにして、授業に向かう私の心の負担は、みちがえるほど軽くなった。以前の私は、「生徒に授業を聞いてもらいたい」「授業を通じて、考えさせたい」などという願いや目標に向かって、一人相撲をとっていた。今はちがう。基本的な知識や論点の提示は、教材研究した私の役目だが、あとは生徒の疑問や意見に沿って、つまり、生徒の“学びたいこと”を掘り起こして授業すればいい。授業は、生徒とともに真実をさがす旅だ、と、いまの私は思っている。